

國學院大學學術情報リポジトリ

神田神社の神職と現代の神田祭

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 秋野, 淳一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001026

神田神社の神職と現代の神田祭

秋野 淳一

はじめに

近年、都市の祭りが大きな賑わいを見せている。東日本大震災の発生によって四年振りの開催となった平成二五（二〇一三）年の神田祭（神田神社大祭）、神田神社が現在地に遷座してから四〇〇年を記念して行われた（御遷座四〇〇年奉祝大祭）平成二七年の神田祭は、いずれも多くの参加者と観客を動員して大きな賑わいを見せた。都市の祝祭の一コマを現代の大都市の祭りからみることができるといえる。

この都市の祝祭（賑わい）を形成する一つの原動力は、平成二五年と平成二七年の神田祭を対象とした筆者の調査^①から、戦後の地域社会の変容に対する地域社会（氏子町会）の反応が影響していることが考えられる。

平成四年の神田祭を対象として分析を行った松平誠は、「都市祝祭伝統の持続と変容―神田祭による試論」の中で、祝祭の構図として大きな可塑性を発揮する点が特色であると指摘している。その理由として、町内会というものが、本来表出機能を中心として機能してきたものであり、危機に際しては必然的に新たな表出機能を模索することになる

からであるとしている。そして、そうした表出機能をかかなり柔軟に発揮できる個別町内の独立性に裏打ちされているために、政治的あるいは社会的な危機に直面したとき、優れた表出機能を発揮してきたことを挙げている。かつて山車の共同運行が不可能になったときに町神輿を創出したり、町神輿が定着すると連合渡御を生み出してきたように、町内会が女神輿を誕生させたり、御輿同好会への柔軟な対応など、現在起こっている神田地域の社会変化に対して文化的なかたちでの挑戦を進めていることから、本来の表出機能に基づく新たな都市の伝統創出の軌跡が描かれていると指摘している^②。松平は以上のように、町内会（町会）を基盤とした「可塑性」が神田祭の賑わいを作る一つの原動力になっていると捉えている。

確かに、平成二五年と平成二七年の神田祭を対象とした筆者の調査から、連合渡御（「おまつり広場」など）、神田神社への宮入の拡大、金曜日の町内企業と懇親を図る祭りの拡大、祭礼の象徴（神輿・山車など）の誕生や復活によって祭りが盛んになり地域社会が再活性化（例、「元祖女みこし」の誕生と参加者の拡大、紺屋町南町会のダンボール神輿の誕生と神田神社への宮入の開始、「桃太郎」の山車の神田神社への展示に伴う二〇年振りの神酒所の設置など）する事例がみられた。社会変動に対して可逆的に反応し、祭りが盛んになっていることが指摘できる。その理由として、町会にとつて、神田祭が最大の行事であるとともに、地域社会の結集を維持するための「最後の拠り所」になっているからであると考えられる^③。つまり、町会を基盤とした「可逆性」が神田祭の賑わいを作る一つの原動力になっていることは平成二五年・平成二七年の神田祭からも窺うことができる。

しかしながら、町会の持つ「可塑性」や「可逆性」だけが神田祭の賑わいを作る原動力なのだろうか。神田祭を現場で参与観察していると目につくことがある。一つは神田神社の神職の活躍である。もう一つは、町会の個人の強い意思と行動力である。

ここで参考となる先行研究がある。石井研士は、東京銀座の小祠や地蔵、高層化した神社などの宗教調査から都市における宗教の現状として二つの特徴を指摘している。一つは、「都市化と宗教変動のプロセスは可逆的なプロセスであることに注意しなければならない。個人や地域の危機的状态において、宗教は再び社会を聖化するように働く可能性がある。そうしたさいに人的要因は重大な要因である。八官神社の西澤半助、豊岩稲荷の岩松鉦太、朝日稲荷の三枝敏郎と沖山三郎などはそうした事例の典型である。特定の人物が神社の復興や存続に大きな役割を果たす」ことである。二つは、「祀るもののフレキシブルな構造である。教義や世界観を厳密に遵守しないことによって、必要が生じたときに、そのための表現様式のさまざまな可能性として存在し続けることができる」としている。特に、一つ目の「人的要因は重大な要因」としている点が注目される。銀座の八官神社の西澤半助らのような個人の活躍が神田祭でも確認できるのであろうか。

他方、國學院大學研究開発推進センター渋谷学研究会（「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」）が調査研究の対象とする東京・渋谷においても、賑わいの形成に個人の活躍（人的要因）がみられる。例えば、渋谷中央街の居酒屋「千両」の賑わいを形成したH・S氏、渋谷中央街の神輿の展示に奔走したM・S氏の活躍が挙げられる。^⑤渋谷の調査研究との比較という意味でも神田祭における神職という個人の活躍に注目した研究は意義あるものと考ええる。

そこで、本稿では、神田神社の神職と神田祭の関わりについてみていきたい。戦後の都市祭りを対象とした先行研究では、都市祭りと宗教者の関係を扱った研究はほとんどなされていない。先行研究が手付かずにしてきた、神職という宗教者と戦後の都市祭りととの関係を切り開くという意味でも、拡大する神田祭と神田神社の神職の関係を検討する意義があると考ええる。

一 参与観察からみえる神田神社神職と神田祭

平成二七（二〇一五）年五月現在の神田神社の神職数は一七人（研修生・巫女・職員を含むと二八人）である。^①氏子町会が一〇八町会にも上ると称され、大規模な神幸祭行列の指揮や氏子町会の神輿宮入など、神田祭に関わる動きをこの人数で運営していることになる。限られた人員で神田祭を運営しているといえるのではなからうか。

平成二七年五月の神田祭における主な神事と神職の携わった活動として以下のものが挙げられる。

（一）主な神事・活動と神職

五月七日（木）の一九時から鳳輦神輿遷座祭が厳粛に執行された。多くの観客が見守る中、白装束（斎服・浄服）を着た神田神社神職、巫女らによって御霊が、一の宮鳳輦（大己貴命）、二の宮神輿（少彦名命）、三の宮鳳輦（平将門命）へ遷された。

五月八日（金）は氏子町会の神輿御霊入れを多くの町会で実施した。複数の町会を担当する神職がそれぞれの町会の御霊入れを行うため、時間を分けて行っている。神田中央連合では、次の町会まで町会の車で神職を送って町会神輿への御霊入れを実施している。

五月九日（土）は八時に神田神社で発輦祭を行って、神幸祭は開始される。神田神社の三柱のご神霊を載せた鳳輦・神輿を中心とした神幸祭の行列は神田・日本橋の氏子町会を巡った。途中、将門塚と両国御



写真1 鳳輦神輿遷座祭（平成27年、筆者撮影）

仮屋では、神田神社宮司の大鳥居信史氏を斎主として神事を行った。また、一八時には神田五軒町会への神酒所がある千代田3331で、初めての試みとして巫女舞が奉納され、神田神社権宮司の清水祥彦氏が挨拶をした。その後、神田神社へ還御し、一九時頃に着輦祭が神田神社で行われた。また、日本橋の有馬小学校からは附祭の行列が神幸祭行列の後ろへつながり、限られた神田神社神職と文化資源学会、有馬小学校の教員らで、附祭の行列を進行させた。附祭には、相馬野馬追の騎馬武者のほか、大江山凱陣、大鯰と要石、花咲か爺さん、浦島太郎などの曳き物が加わった。筆者も浦島太郎の曳き物に参加し、慶應幼稚舎の子どもたちと「浦島太郎」の歌を歌いながら、アドバリンでできた浦島太郎の曳き物を曳いて、小網町児童公園から神田神社まで練り歩いた。途中の秋葉原から東京藝術大学学生が制作した「白虎」、万世橋交通少年団、ボーイスカウト千代田第六団などが合流したが、合流のタイミングや順番などは現場の神職が臨機応変に対応しながら、行列の運営をしていた。三熊野神社から里帰りした柵里（山車）二基も附祭の行列のあとに参加したが、ここにも神田神社神職が付き添い、運行を管理していた。また、夜からは、富山町町会と日本橋の氏子町会による神輿宮入が行われ、社殿前で神輿を下し、神輿と担ぎ手のお祓いを神職が行った。

五月一〇日（日）は、終日、神田神社への氏子町会神輿の宮入が行われた。神輿宮入に際しては、神田神社大鳥居横に「指揮台」の櫓を組み、そこに神田神社の神職を配置して、大鳥居前から神田神社境内へ向かって神輿宮入を誘導する。また、神田神社拝殿前に氏子町会の神輿が到達すると、町会の神輿の紹介などを神田神社神職が行う。拍子木が叩かれ（木が入れられ）、神輿が下ろされると、お祓いを受けるために低頭する旨、だいきく様とえびす様の福鈴が鳴らされる旨、二礼二拍手一礼の神田神社への参拝の誘導、宮入を果した町会長の挨拶の誘導、還御する町会の神輿の紹介などのアナウンスを神田神社神職が行う。また、神輿宮入の際には、神田神社宮司の大鳥居信史氏の姿もみられた。このほか、一〇日の昼に秋葉原中央通りで多数の神輿が連合渡御をする「おまつり広場」では、連合渡御

に先立って式典が街宣車の上（自民党本部から借りた車）で行われるが、ここにも神田神社宮司・大鳥居信史氏が参加した。神輿宮入を終えた町会では、神田猿楽町会や神保町一丁目町会など、一〇日の夕方から夜にかけて町会神輿の御霊返し（御霊抜き）を神田神社の神職が行った。

なお、一〇日の神田祭の様子は、神田神社とNTTコミュニケーションズが制作するインターネットTV「神田祭c.h.」で配信された。配信された映像はのちに編集されて、『神田祭大図鑑』（DVD）として販売された。

五月一四日（火）の一一時から献茶式、同日の一八時から明神能が催された。そして、五月一五日（水）の一四時から神田神社例大祭が執行された。神田神社宮司以下の神職が厳粛に祭典を執行し、氏子町会の関係者が参列した。

（二）御霊入れと御霊返し

平成二七（二〇一五）年の神田祭では、御霊入れは把握分であるが七〇町会と二連合（錦連合三町会、小川町連合四町会）で実施された。その一方で、御霊返しは一七町会で確認できた。町会の神輿が神酒所に還御した時間と神田神社神職が御霊返しに来ることが可能な時間が一致した町会で実施されていることが窺われる⁸⁾。つまり、町会と神職双方の人的要因とタイミングが実施率に影響していることが考えられる。



写真2 東神田町会御霊入れ（平成27年、筆者撮影）

(三) 神田祭入門講座・アサゲ・ニホンバシ

神田祭に先立ち、四月八日(水)の一九時からアーツ千代田3331を会場として、女性を対象とした神田祭入門講座が行われた。神田神社のバックアップと外神田連合の協力のもと、講座は開催された。神田神社権宮司の挨拶、神田神社神職による神田祭の歴史についての映像や画像を使った講義のあと、メイクや半纏の着付け、担ぎ棒を使った神輿担ぎの実演(外神田連合が協力)が行われた。

四月一七日(金)の「第六二回アサゲ・ニホンバシ」(朝餉・日本橋)では、室町一丁目の三井ホールを会場として、朝食を食べながら神田神社神職によって「神田祭とゴルフ日本橋会」と題した講演が行われた。講演では、神道や神田神社、神田祭、ゴルフ日本橋会を通じた関わりが室町一丁目会の神田神社への神輿宮入へつながったことなどが、多くの画像を使ったスライドを使って紹介された。

以上のように、神田神社の神職は限られた人数で神事を厳粛に執行するのみならず、神田祭の賑わいを彩る様々な活動に従事していることがわかる。

二 神田祭以外の氏子町会と神社・神職との関わり

神田祭以外においても、当然、氏子町会と神田神社・神職との関わりを持つ場が年間を通じて複数存在する。まずは神田神社の年中行事からそうした場を確認しておきたい。

(一) 神田神社の年中行事

『神田明神史考』には、大正八(一九一九)・九年の歳時記として、初日の出、初詣、一番組の初詣で新年会、神楽

殿における太々神楽、節分祭・拝殿に整列した年男、夏越しの形代流し（隅田川）、七五三参り、歳の市・メ飾り店、歳の市・羽子板店と警戒の宮鍵講員、歳の市・御防講詰所、煤払い、除夜七祭の内・神門祭、除夜七祭の内・疫神祭、除夜七祭の内・道饗祭の写真が掲載されている。⁹⁾

昭和六（一九三一）年発行の『神田明神誌』には、「現在行はれつゝ、あるもの」として神田明神の年中行事が挙げられ、旧行事には「△」（三角印）が付されている。¹⁰⁾ 以下に列挙すると、「一月一日 歳旦祭」「一月一日 初日出拜」「二月二日 元始祭」「一月八日 神事始△」「一月九日より一月末日まで 氏子各町神楽奉奏△」「二月節分 疫神祭授興」「二月十一日 紀元節祭」「二月十九日 祈年祭」「三月春分ノ日 春季皇靈祭遙拝」「四月三日 神武天皇祭遙拝」「四月二十一日 大々神楽△」「四月二十九日 天長節祭」「隔年五月十三日より十九日まで 神幸祭」「六月三十日 大祓」「七月三十日 明治天皇祭遙拝」「九月十四日 前斎式」「九月十五日 例祭」「九月秋分ノ日 秋季皇靈祭遙拝」「十月十七日 神嘗祭遙拝」「十一月三日 明治節祭」「十一月十五日 七五三祝」「十一月廿五日 新嘗祭」「十二月二十日二十一日 年の市」「十二月卅一日 大祓」「十二月卅一日 除夜祭△」である。

戦前の神田神社の年中行事においても、神楽始や氏子各町神楽奉奏、大々神楽、除夜祭などが「旧行事」として挙げられていて、現在行われているものと対比していることから、旧行事は昭和初期の段階では中断していたことが窺われる。次に、戦後の神田神社の年中行事について概観しておきたい。

昭和六〇年発行の『奉祝天皇陛下御在位六十年 神幸祭写真集 神田明神』には、「神田神社年中行事」として、神楽始めの儀、神楽始めに参列の氏子総代、節分祭に参進する氏子総代、節分祭豆撒風景、将門塚例祭・長銀講堂、大祓形代流し御座船、大國祭の賑い、秋大祭に参列する氏子総代の八枚の写真が掲載されている。¹¹⁾ 昭和初期には、中断していた神楽始が復活していることが窺える。

『神田明神史考』には、平成三（一九九二）年の神田神社の年中行事として、一月一日・初詣、一月八日・神楽始め、一月一四日・大国まつり、一月一五日・寒中がまん大会（寒中禊鍊成）、二月三日・節分祭（豆撒き式）、四月三日・春大祭（祈年祭）、四月五日・健育祭（新入学児童参拝）、五月一五日・献茶式（表千家家元奉仕）、五月一五日・例大祭、七月三日・大祓形代流却神事（東京湾浦安沖）、九月彼岸中・将門塚前祭、九月彼岸中・将門塚例祭（長銀講堂）、十一月一五日・七五三詣、十一月二五日・秋大祭（新嘗祭）が挙げられている。また、結婚式についても「明神会館より参進」として、写真入りで紹介している。¹²⁾

『神田神社 平成の御造替事業竣成報告書』には、平成一一年の年間行事（予定）として、元旦・初詣、一月八日・神楽始、一月一四日・だいこく祭、一月一四日・寒中がまん大会、二月三日・節分祭、四月三日・春大祭（祈年祭）、四月五日・健育祭（新入学児童参拝）、五月一八日・例大祭、五月一九日・献茶祭（表千家家元奉仕）、六月三〇日・夏越大祓式、七月二日・大祓形代流却神事、七月七日・七夕祭、九月彼岸中・将門塚例祭、十一月一五日・七五三詣、十一月二五日・秋大祭（新嘗祭）が挙げられている。¹³⁾

神田祭公式ガイドブック『平成二七年神田祭』には、「神田明神の一年」として、一月一日・初詣・歳旦祭、一月初旬・仕事始め参拝、一月中旬・だいこく祭・寒中禊（がまん会）・四條流包丁儀式・祈願串成就祭、一月下旬・神楽始（太々神楽）、二月三日・節分祭豆まき式、二月一日・紀元祭、二月下旬・末社・浦安稻荷神社例祭、三月上旬・末社・末廣稻荷神社例祭、四月初旬・崇敬会春祭り・新入学児童健育祭・祖霊社春季例祭（氏子英霊慰霊祭）、四月三日・祈年祭（春大祭）、五月一日・合祀殿春例祭、五月一四日・献茶式（表千家家元奉仕）・明神能（金剛流）、五月一五日・例大祭、五月中旬・神田祭（二年に一度）、六月初旬・京都神田明神例祭、六月初旬・撰社・大伝馬町八雲神社例祭、六月初旬・撰社・小舟町八雲神社例祭、六月三〇日・夏越大祓式、七月初旬・大祓形代流却神事、七月七日・七夕祭、

九月彼岸中・将門塚例祭、一〇月一日・合祀殿秋例祭、一〇月中旬・末社・金刀比羅神社例祭、一〇月中旬・末社・三宿稻荷神社例祭、一月中旬・末社・籠祖神社例祭、一月中旬・七五三詣祝祭、一月二五日・新嘗祭（秋大祭）、一月二二日・煤納奉告祭、一月二三日・天長祭、一月下旬・除災大祓式、一月三一日・師走大祓式・除夜祭が挙げられている。¹⁾

ここでは、平成三年、平成一一年、平成二七年の神田神社の年中行事を比較すると、平成三年と平成一一年では、末社・撰社の例祭など記載されていない行事の存在が想定されるものの、平成一一年から七月七日の七夕祭が加わり、平成一一年から平成二七年では、一月初旬の行事始め参拝、四月上旬の崇敬会春まつり、五月一四日の明神能（金剛流）など、年間を通じた新たな行事が加わったことが窺える。また、平成三年と平成一一年では、一月八日であった神樂始が、平成二七年では一月下旬になるなど、固定されていた祭日が初旬・上旬・中旬・下旬などと、毎年、日曜・祝祭日の日付に祭日に対応させながら、多くの参拝者を集ってもらおうと工夫していることがわかる。その一方で、四月三日の祈年祭、五月一五日の例大祭、一月二五日の新嘗祭（秋大祭）の祭日は、動かされていない。これらの大祭の日を中心に、氏子町会の人たちは神社の祭典に参列している。例えば、平成二六年の新嘗祭（秋大祭）では、翌・平成二七年の神田祭の日程等の予定が氏子町会に報告された。ただし、初詣を含め、行事始めの企業参拝や崇敬会の春祭りなど、氏子以外の崇敬者や個人、氏子の企業にも開かれた行事も多く催されていることがわかる。平成二七年の仕事始めの日には、一三五〇社を超える企業が神田神社へ昇殿参拝した。

神田神社の神職によれば、崇敬会春祭りのポスター配り、大祓式、七夕祭、七五三、秋大祭（新嘗祭）で神田神社の氏子町会の関係者（町会関係者には崇敬者もいる）と協力して、広報等をしてもらい、これらの行事を実施しているという。

(二) 氏子町会の年中行事との関わり

神田祭以外の町会の年中行事に神田神社や神田神社の神職との関わりがみられる。

〔初詣〕

多くの町会で行っているのが、新年の神田神社への初詣（昇殿参拝）である。平成二五（二〇一三）年神田神社に宮入を果した町会と参考事例二町会を含む五四町会と二連合（錦連合・小川町連合）を対象とした実態調査^⑤（インタビュー調査）から判明した町会で初詣を行っているところは以下の通りである。

多町二丁目町会（元旦、六五人参加）、淡路町二丁目町会（一月二日一〇時半・三〇人参加）、須田町南部町会（元旦・一五世帯参加）、須田町北部町会（元旦〇時半集合・一五人参加）、宮本町会（一月二日・三〇〜四〇人参加、明神会館で新年会）、神臺會（一月二日・一七〜一八人参加）、外神田三丁目末廣町会（二月二日一〇時半・一五人）、岩本町三丁目町会（元旦・三〇人）、東神田町会（三〇人参加）、東神田豊島町会（子どもを含む三〇人参加）、神田佐久二平河町会（元旦に実施）、神田佐久間町三丁目町会（一月第三土曜に新年会と一緒に実施・約二〇人参加）、神田佐久間町四丁目町会（元旦一五時・一二〜一三人参加）、神田和泉町町会（一月三日）、人形町二丁目三之部町会（二〇人）、東日本橋三丁目橋町会（役員二〇〜三〇人参加）などである。

少なくとも一八町会が町会で神田神社への初詣（昇殿参拝）を実施している。昇殿参拝の際には社殿や撤下所などで神職と町会関係者が挨拶を交わしている。また、町会では新年会を開催する町会が複数あるが、神田中央連合を担当する神職が担当町会の新年会に顔を出しているという。昇殿参拝の際に受けた祈祷札や神供は新年会の席などで、町会員に配られる。

〔その他の行事での関わり〕

二月には、小川町連合で祀る幸徳稲荷神社の節分祭や秋葉原東部地区連合で祀る草分稲荷神社の初午祭などを、氏子町会の稲荷神社の祭りを齋主として執行するのも神田神社の神職である。

四月の健育祭には、東日本橋二丁目町会の子どもが神田神社へ参拝する。平成二七年は四月一日に神田神社へ参拝し、町会の子ども一二人が参加して行われた。神社が行う健育祭とは別に、神保町一丁目町会では、三月中に町会の小中学校の卒業祝いと入学祝いを、昇殿参拝をして行う。

神田祭の蔭祭に、史蹟・将門塚保存会大神輿の発御祭、還御祭などの神事を行い、また町会の神輿の巡幸を行う神田和泉町町会の大・中・小神輿、東日本橋二丁目町会の子ども神輿に御霊入れ・御霊返し(16)の神事を神田神社の神職が行う。また、宮本町会の子ども神輿の巡幸に際しても、神田神社拝殿前で、神事の内容や意味の解説付きで御霊入れの神事が行われた。(16)

一二月の神田神社の「お札配り」では、氏子町会の崇敬会員を神田神社の担当神職らが廻る。町会長（崇敬会員）が町内の会員分をまとめて受け取ることもある。

また、須田町中部町会を担当する神職は、平成二五年を例にしてみると、二月の豊潤稲荷神社の初午祭の祭典を行い、直会の席で町会の人たちと懇親の場を持ち、五月下旬に行われた須田町中部町会六〇周年記念式典に参加し、九月の町会の旅行に参加するなど、町会との関わりを大切にしている姿をみる事ができた。(17)

以上のように、ここで取り上げたものはごく一部であるが、神田神社の神職と氏子町会の人たちは、神田祭以外の様々な行事において、交流する機会を持つてることがわかる。

(三) 氏子町会の神田神社のイメージ

こうした年間を通じて町会との関わりを大切にしている神職の存在は各町会にどのような影響を与えているのだろうか。ここで一つの参考になるデータがある。

平成二五(二〇一三)年神田神社に宮入を果した町会と参考事例二町会を含む五四町会と二連合(錦連合・小川町連合)を対象とした実態調査⁽⁸⁾(インタビュ調査)において、各町会の町会長をはじめとした町会関係者に「神田神社は何の神様を祀る、どのような神社か」を伺い、神田神社のイメージについて回答してもらった。

それによると、回答の多い順に、「平将門」(三四町会)、「氏神様」(一八町会)、「商売(繁盛)の神様」(一一町会)、「だいこく様」(九町会)、「えびす様」(六町会)、「少彦名命」(四町会)、「神様は三人」(四町会)、「大国主命」(三町会)、「大己貴命」(三町会)、「江戸の総鎮守」(三町会)などの回答があった。平将門のイメージが依然として強いことがわかるが、「氏神様」としての性格と「商売の神様」の性格を併せ持ったイメージが形成されていることがわかる。このうち、平将門に関わるもので、具体的なイメージを言語化しているものに、「平将門様。神田の人間は成田山にはいかない」(司一町会)、「ちゃんとお祀りしないと将門さんは怖い」(淡路町一丁目町会)、「将門がいるとはいってはいけない」(外神田四丁目目代会)などがある。また、氏神様に関わるもので具体的なイメージを言語化しているものに、「子どもの頃からの氏神。心休まる氏神様」(内神田旭町々会)、「氏神。氏子と氏神の距離間は変っていない」(栄町会)、「子どもの頃からの氏神」(鍛冶町一丁目町会)、「みんな氏子だと思っている。いい意味でプライドを持っている」(神田佐久間町四丁目町会)、「地域を守ってくれる神様」(外神田三丁目金沢会)がある。

このほか、「子どもが生まれるとお祓いを受けに行ったり、商売繁盛の祈願にもいく、身近な神社」(司町二丁目町会)、「子どもの頃から神社でセミを取ったり、親しみのある神社」(淡路町二丁目町会)、「神田神社はステータス。

祭礼も大きいし、氏子町会の規模も大きい。神田祭は町神輿の祭り。一つ一つの町会が競い合う祭り。そうした求心力を持つ神田神社はポリュームも大きい。非常にステータスを感じる」(須田町北部町会)、「最初の頃はさみしかったが、ずいぶん隆盛してきた。お祭りもここ一五年くらいで盛んになってきている」(神臺會)、「どの神様をお祀りしているかというより、神田神社そのものが持っているエネルギーが大きい」(岩本町三丁目町会)、「住民のすべての心の支え」(神田大和町会)、「明神様は心の拠り所。善意の象徴」(東神田町会)、「神田神社は下町につながる神社。商売繁盛に関連していて親しみやすい」(東神田豊島町会)、「神田神社は庶民に開かれた神社」(室町二丁目会)、「あそこに行くとなると楽しめる神社。資料館もあり、面白い行事もあり親しめる」(東日本橋三丁目橋町会)などのいずれも肯定的なイメージを回答している。

特に、「親しみやすい」「楽しめる神社」といったイメージの形成には、各氏子町会を担当する神田神社神職との関係の深さも窺える。例えば、東日本橋三丁目橋町会や室町一丁目会の神田神社への神輿宮入は担当神職との個人的なつながりも働き、実現に至っている。

三 神田祭の変遷にみる神職と賑わいの場の形成

ここでは、千代田区のコミュニティ新聞である『週刊千代田』の記事を中心に、平成四(一九九二)年の松平誠の



写真3 神輿宮入と神職 (平成27年、筆者撮影)

調査前後から現在に至るまでの神田祭の変遷を神職と賑わいの観点からみておきたい。ただし、一九七〇年代後半にも一九九〇年代（平成の初め）の動きにつながる萌芽があるため、まずこの動きから押えておきたい。

（一）一九七〇年代後半の動き

昭和五二（一九七七）年では、五月一二日に献茶式、五月一三日に宵宮、五月一四日に神幸祭、一四日午後から、歩行者天国で神輿連合渡御（中央通りに一〇〇基の神輿を集めたといわれるもの）が行われた。¹⁹

昭和五五年は蔭祭の年であった。しかし、五月一〇日（土）の午後に、「神祭会」の若い衆が神輿を担いで秋葉原電気街を練った。五月一日（日）には、神田和泉町会では神輿の巡幸、内神田旭町々会では子ども神輿の巡幸が行われた。神田明神境内では、新しく出来た神輿庫で神田祭の古い写真の展示、神楽殿では奉納演芸などの祭礼行事を五月一〇日～一五日まで実施した。²⁰ この年、「明神稚児太鼓」が結成された。明神稚児太鼓が形成されるきっかけは、神田神社の氏子総代の一人がテレビで福井県剣神社の「明神太鼓」という名前の子ども太鼓をみて、強く心に焼きついた。「こんな可愛らしい子供太鼓が神田明神にできないものか」と、当時神田神社の禰宜であった大鳥居信史氏（現・神田神社宮司）に相談した。大鳥居氏は早速、剣神社に見学に行き、明神太鼓を八ミリビデオにおさめて総代会で映写会を催した。そして、明神将門ばやし会が子ども太鼓の面倒を見ることになり、明神将門太鼓保存会による神田明神稚児太鼓が結成されることとなった。²¹

（二）一九九〇年代（平成に入ってから）の動き

次に、平成に入ってから動きをみておきたい。

平成二（一九九〇）年の神田祭では、神幸祭に復活した諫鼓（かんどこ）山車、旧神田市場前から稚児行列が参加した。そして、その後ろに羽衣山車（岩本町二丁目松枝町会）が加わった。また、神輿宮入では須田町中部町会と多町二丁目町会の二基の女神輿が宮入を果した。⁽²²⁾

平成四年の神田祭では、茨城県から神田祭の行列を見て創始したという「町田火消し行列」が、五月九日（土）の神幸祭（一八時頃から開催された旧神田市場跡の「おまつり広場」のイベントから）に飛脚ら一二〇人が参加した。⁽²³⁾ 神輿宮入では、東神田町会の神輿（昭和二九（一九五四）年製作の神輿）が初の宮入を果した。⁽²⁴⁾

平成六年の神田祭では、担ぎ手の定員一六〇〇人である神田市場千貫神輿が七年振りの渡御を行った。⁽²⁵⁾ これに、茨城県岩井市から参加した将門武者行列が、おまつり広場付近で合流した。⁽²⁶⁾ また、企業協力によるクライスデルワゴンパレードという馬車行列に加え、日本航空株式会社のフライトアテンダントが神田祭に参加した。さらに、株式会社博報堂をはじめ各社の協力で「神田祭ウォークラリー」の企画も加わった。これによって、神田神社権宮司の清水祥彦氏は「企業の参加による祭礼活性化はさらに進んだ」としている。⁽²⁷⁾

平成七年の七月一三日～一六日に行われた「靖国みたま祭り」には、神田靖国講が三基の神輿（司一町会、神田旅籠町会、鍛冶町二丁目町会）を出し、麴町区と連合渡御を実施した。⁽²⁸⁾ この巡幸には、外神田連合の現・神臺會会長のT・N氏が副委員長として参加した。

平成八年、氏子町会の一つの神田同朋町会が神輿を新調した。同年三月九日に神田神社社殿前で新調神輿を披露し、明神会館地下ホールで披露宴を催した。この席で神田神社宮司の大鳥居信史氏は「お膝元の町会で二五年ぶりのお神輿の完成。神田祭り近し、の実感がする。大祭に一層の華を添えるものと思う」と祝辞を述べた。⁽²⁹⁾

平成八年の神田祭には、遠州大須賀三熊野神社の祢里二基・二五〇人が里帰りを果たした。祢里二基は、五月一

日（土）の神幸祭の後ろに加わった。⁽³⁰⁾ 同日一昨日一七時半から、秋葉原駅前へ神田神社間を「おまつり広場」（歩行者天国）として開放し、縁日を開催した。翌一昨日（日）には、宮人を済ませた外神田地区の一基の神輿が歩行者天国に繰り出した。そこに四尺の大神輿（約二〇〇〇人の若衆）、三熊野神社の杵里二基（二五〇人）も合流した。⁽³¹⁾

平成八年の二月六日に「神田祭の會」が結成された。「神田祭の會」は、今後の神田祭りを一層盛り上げるため、情報交換作りをできるネット・ワークを作りたい」との思いから、二月六日一八時に明神会館へ六四人が参集した。神田神社宮司の大鳥居信史氏、権禰宜二人も参加した。この會が結成された背景には、平成八年の次の大祭（神田祭）が、神田神社の本殿などの大改修（平成の御造替事業）によって三年後の平成一一年になることも影響したとみられる。⁽³²⁾

平成九年、平成の御造替事業（平成七年～平成一一年五月）の一環で齋館（一階が多目的祭祀殿、二階・三階が資料展示室と収蔵庫〔現・神田明神資料館〕）を竣工した。齋館の二階展示室に土人形の神幸祭の行列を展示した。⁽³³⁾

同年、一二月四日から、神田神社で江戸を題材としたカルチャー講座「明神塾」を、明神会館を会場に始められた。⁽³⁴⁾

平成一〇年、明神齋館落成記念に神田・日本橋の神輿三基の渡御を行う「平成一〇年神田神社蔭祭り神輿渡御提案書」を神田神社宮司・大鳥居信史氏が作成した。しかし、実現には至らなかった。その代わりに同年の五月には、神田和泉町町会（町内渡御）・岩本町三丁目町会（岩本町・東神田連合八町・五尺三寸の神輿、宮出・宮入）・神田旭町々會（町内渡御、近隣八町会を巡幸）が神輿の巡幸を行った。⁽³⁵⁾

平成一一年は三年振りに本祭（神田祭）が行われた。この年、四尺の神社神輿（宮神輿）が水天宮の力添えにより奉納された。⁽³⁶⁾ 四月一六日（金）の一八～二〇時には、神田神社で女性のための「お祭り入門講座」を開催した。⁽³⁷⁾

同年五月一五日・一六日の神田祭には、遠州大須賀町の杵里二基が参加した。一二時半過ぎ、「おまつり広場」（秋葉原中央通り・歩行者天国）の式典（神田神社宮司、千代田区長、大須賀町町長らが街宣車の上から挨拶）、旧神田

市場の千貫神輿宮入と築地魚河岸会・水神社の大神輿が宮入を実施し、宮入後、「おまつり広場」へ向かうなど、延べ一〇〇万人を超える人出となった。⁽³⁸⁾

同年一月一二日に、天皇陛下御即位一〇年を祝う国民祝賀式典が皇居前広場で行われた。その第一部の「日本の祭り」に神田神社の神社神輿（四尺）の渡御を決定した。⁽³⁹⁾

平成一二年、サンフランシスコ桜祭に神田祭を参加させた。⁽⁴⁰⁾

平成一三年は、附祭として、江戸時代に流行した「曳き物」を巨大な赤ちゃんに見立てて登場させ、インターネットや各種ITを駆使した「KIXプロジェクト」を実施した。また、「お祭入門講座」の開催や大江戸ダンスという青少年を中心とする踊りチームの参加も行われた。⁽⁴¹⁾

平成一四年、皇太子ご夫妻に敬宮愛子さまが誕生したことを記念して、神田祭で特大神輿を担いだ。特大神輿は、高さ約二m四〇cm、極彩色の鳳凰が載り、重さは少なくとも一トンを超える。約一五〇人が交代で担いでも息が切れるといふ。五月一二日の一三時、日本橋三越前を出発して中央通りを北上し、一七時に神田神社へ到着する。また、神田神社境内には、小型の「山車ロボット」（神田錦町の東京電機大学の学生の制作）が七台置かれた。山車ロボットはリモコンで遠隔操作できたといふ。⁽⁴²⁾

(三) 江戸開府四〇〇年以降の動き

平成一五（二〇〇三）年、江戸開府四〇〇年を記念して、東日本橋二丁目町会が船渡御による神輿宮入を行い、東京藝術大学学生が制作した四台の曳き物、底抜け屋台の演奏が復活した。また、江戸天下祭フォーラムの開催、金剛流の遠藤勝實師範による明神能が初めて開催された。⁽⁴³⁾

この年、大手・丸の内町会（大手町・丸の内地区）の神田祭への参加が開始された。三井物産の社員二二四人が史蹟将門塚保存会の参与法人として神田祭を盛り上げようと、神田神社から借りた神輿で宮入した。その後、社会貢献活動の一環として独自に担げる神輿を作ろうという機運が高まり、史蹟将門塚保存会のメンバーで大神輿を新調した。平成一六年、蔭祭の年であったが、平成一二年に製作された神社大神輿を、氏子区域を三地区に分けて輪番で神輿を巡幸させた⁽⁴⁾。

平成一七年、『神田明神祭礼絵巻』に描かれた「大鯰と要石」の曳き物を二一五年ぶりに復活させるとともに、三越やNTTコミュニケーションズなどの企業協力による曳き物も初めて参加した⁽⁵⁾。また、史蹟将門塚保存会大神輿が宮入を果たした。史蹟将門塚保存会の参与法人である三菱地所・三井物産・三井生命保険・物産不動産・三菱東京UFJ銀行・竹中工務店・プロミス・丸紅・パレスホテル・三菱不動産の一〇社で神輿を担いだ⁽⁶⁾。そして、将門公ゆかりの相馬野馬追騎馬武者の特別参加を実施し、「インターネットTV神田祭チャンネル」という「情報化社会に対応した神賑行事」も行われた⁽⁷⁾。

平成一八年、八月二日の新潟県長岡市の長岡まつりで、七・一三水害や中越地震からの復興を願い、神田明神神輿を神田神社の氏子有志四〇人と長岡市民ら約一二〇人が担いだ⁽⁸⁾。

平成一九年、神田祭復元プロジェクト（文化資源学会創立五周年記念事業）を春に立ち上げた。その一環で、五月二日に日本橋三越前から神田神社まで「大江山凱陣」の練物を出し、約六〇人が参加した。

平成二一年の五月九日の神田祭では、附祭の行列の規模をさらに大きくして一〇五人の文化資源学会の会員と神田祭へ参加した。「大江山凱陣」のほか、唐子や仮装人物など新たなキャラクターが加わり、東京藝術大学学生による鳥天狗、白象と一緒に練り歩いた。

平成二三年、東日本大震災の影響により、神田祭は中止となった。この年の一〇月三〇日に、「東日本大震災復興鎮祭祈願神輿渡御祭」を執行した。

平成二五年の神田祭では、附祭に「花咲か爺さん」の曳き物が新たに参加した。この年は「桃太郎」の山車（岩本町二丁目岩井会）の神田神社への展示を実施した。

平成二六年、神田神社が創建されて以来、初めてとなる女性神職が誕生した。

平成二七年の神田祭（御遷座四〇〇年奉祝大祭）では、神田祭と「ラブライブ！」とのコラボレーションが行われ、多くの若者で神田神社境内が賑わった。また、「浦島太郎」の曳き物が新たに加わった。

（四）神田神社神職の言説

神田神社・権宮司の清水祥彦氏は、「現代の神田祭について」という小論の中で、「昭和六二年に就任した大鳥居信史宮司のもとでは、神幸祭に附祭を積極的に招聘して、ここに活気がふたたび江戸、東京の町に戻ってきたのである」とした上で、平成二（一九九〇）年から平成一七年までの神田祭の変遷を概観し、「このように現代の神田祭は、氏子・市民・企業はもちろんのこと、地方都市の参加やIT技術導入にも積極的に取り組んでいる。天下祭としての豊かな祭礼文化の復権を目指し、時代や流行を意識した祭礼活性化への努力が不断に実施されているのである」と締めくくっている。

まさに、清水氏の指摘のように、平成一五年の江戸開府四〇〇年の記念行事がなされて以降、江戸時代の神田祭の祭礼文化を見直し、曳き物（山車）、祭りに関わる芸能などの再評価がなされた。文化資源学会などを巻き込んだ附祭の復活を、宮司である大鳥居信史氏のもと、神田神社が主体となって行ってきたことがわかる。その延長線上に、「ラブライブ！」と神田祭のコラボレーションがあるのではなからうか。

また、神田神社宮司の大鳥居信史氏は、企業の関わりについて、「企業が求める神社の役割とは？」⁵⁰の中で、「神田明神は千代田区・中央区といった日本有数のオフィス街が氏子地域にあります。特に大手町などの地域には住民がほとんどいません。そこで神田明神では二十年ほど前から、企業の氏神意識の定着を図るように促してまいりました」と述べている。こうした働きかけによって、それまでは企業内神社への参拝はあったが、企業が正月に参拝する風習はなかった。現在では正月に六〇〇〇社の企業が参拝するようになり、都内全体でも企業参拝が増えてきたとしている。そして、大手町・丸の内界隈の企業では、将門塚に尻を向けて席配置をしないなど、篤い信仰があり、三井物産をはじめとする大手の企業では、将門塚保存会の役員として、参与法人役員会を結成し、将門塚への信仰が現在でも続いているとしている。その端的な例が神田祭における神輿で、神社のお祭りは基本的に、氏子地域住民が中心となっていくが、住民がほとんどいない大手町・丸の内地域では、企業の協力を仰いでいる。将門塚保存会の参与法人役員会から平将門公の神輿が奉納され、平成二五年の神田祭では約一三〇〇人も会社員が参加して神輿を担いだことを紹介している。そして、最後に「神田祭でお神輿が出るのは隔年なのですが、大手町・丸の内では毎年担がれています。隣接していても日頃はほとんど機会がない企業の社員同士や地域の方々为一体となつて打ち解ける絶好の機会となり、ますます盛り上がりを見せております。神社への信仰は今も変わりなく続いており、人と人をつなぐ場所になっているのです」と締めくくっている。

ここからは、住民が少なくなった氏子地域で企業との関わりを重視する姿勢が窺える。大鳥居信史氏の企業に対する神社のあり方が、正月の企業参拝や神田祭・蔭祭における史蹟・将門塚保存会大神輿の巡幸にも大きく影響していることがわかる。

こうした大鳥居氏の江戸の祭礼文化を再評価した附祭の復活や企業との関係性を重視し、会社員を巻き込んでいく

取り組みなど、神田神社と神田祭に新たな賑わい作り出そうとする姿勢は、神田神社の他の神職の言説からもみえてくる。例えば、神田神社権禰宜の岸川雅範氏は、平成二十七年の神田祭の公式ガイドブックに、「ラブライブ!」のポスターが掲載されたことについて、週刊ダイヤモンドの取材に対して、「二〇〇年後に、このガイドブックが現在をうかがい知る貴重な歴史的資料になっているかもしれない」と答えている⁽³¹⁾。また、権宮司の清水祥彦氏は、「昔の姿を墨守するだけでは神社は輝きを取り戻せない」というインタビュー記事の中で、神社界が厳しい状況に置かれていることを述べた上で、「なぜ、神田神社では人を集めることができるのか。それは宮司の強いリーダーシップの下、私たちが現在の神社が置かれた状況に対する強い危機感を共有しているからです。常に時代の変化を敏感に察しながら柔軟に対応していく。こうした姿勢なくして神社が生き残っていくのは難しいでしょう」としながら、神田神社は秋葉原という流行の発信地の氏神で、サブカルチャーと神社の歴史・伝統を擦り合わせながら新しいあり方を模索しているとしている。そして、こうしたあり方に対して商業主義が行き過ぎているといった批判もあるが、「昔の姿を墨守するだけでは、神社が輝きを取り戻すことは難しい。時代の流れに柔軟に対応しながら新しい物語をつくっていく。この逆境を新しい文化を築いていく機会にできればと考えています」と締めくくっている。

こうした歴史・伝統を踏まえながらも、新しい物語・文化を形成していくという考え方があればこそ、岩本町二丁目岩井会の「桃太郎」山車の神田神社への展示や、紺屋町南町会のダンボール製神輿の神田神社への宮入が実現したのではなからうか。また、少し年代は遡り、昭和五二(一九七七)年に誕生したとすると、神田神社宮司が大鳥居吾朗⁽³²⁾氏の時であるが、女性だけで担ぐ須田町中部町会の「元祖女みこし」の宮入を神田神社が受け入れたのではなからうか。そうした神田神社とその神職の姿勢も影響して、誕生や復活した祭礼の象徴が地域社会の活性化につながったのではないかと考える。

おわりに

このように、現代の神田祭の拡大には、社会変動に対する町会の「可塑性」や「可逆性」のみならず、神田神社が祭礼の象徴（神輿や山車など）の創出や活用を積極的に推進してきたことが影響しているといえる。特に、神田神社・宮司・大鳥居信史氏の神田祭を盛り上げようとする強い意思が祝祭の場の形成に大きく影響していることが窺われる。そうした神田神社宮司の思いに呼応するかのように、「おまつり広場」（秋葉原中央通り）における連合渡御の開始にみられるように、氏子の側の個人の活躍が新たな賑わいの創出に大きな役割を果たしている。

神田神社宮司の意思は各神職にも受け継がれ、文化資源学会と協働で行う附け祭の「復興」という新たな賑わいの形成や町会の神輿宮入の拡大にもつながっているのではなからうか。そして、岩本町二丁目岩井会の事例にみられるように、平成二五（二〇一三）年の「桃太郎」山車の神田神社への展示を通じた二〇年振りの町会の神酒所の設置、平成二七年の町内渡御の復活など、町会の祭礼の象徴が神田神社境内へ受け入れられることを通じて地域社会が再活性化しているのである。つまり、神田神社とその神職による祝祭の場の形成と町会の可塑性や可逆性が呼応し、祭りが拡大していることが窺えるのである。

註

- (1) 秋野淳「都市祭りの経年的変化―戦後の地域社会の変容と神田祭五〇年の盛衰―」『國學院雜誌』第一一六卷第一一〇号、國學院大學、平成二七年。及び、秋野淳「神田祭調査報告―平成27年 神田神社・御遷座400年奉祝大祭の分析―」『神道研究集録』

- 第三〇輯、國學院大學大学院神道学・宗教学専攻学生会、平成二八年。
- (2) 松平誠「都市祭祭伝統の持続と変容―神田祭による試論」『応用社会学研究』第三五号、立教大学社会学部研究室、平成五年、六一頁。
- (3) 前掲秋野「都市祭りの経年的変化―戦後の地域社会の変容と神田祭五〇年の盛衰―」。及び、前掲秋野「神田祭調査報告―平成27年 神田神社・御遷座400年奉祝大祭の分析―」。
- (4) 石井研士『銀座の神々 都市に溶け込む宗教』、新曜社、平成六年、二七四頁。
- (5) 前掲石井『銀座の神々 都市に溶け込む宗教』、二七四頁。
- (6) 國學院大學研究開発推進センター「渋谷学研究会編『渋谷聞きがたり3 渋谷中央街を語る―再開発を迎える商店街の記録―』國學院大學研究開発推進センター、平成二八年。
- (7) 『平成二七年神田祭』神田神社、平成二七年に記載された神職数に基づく。
- (8) 前掲秋野「都市祭りの経年的変化―戦後の地域社会の変容と神田祭五〇年の盛衰―」。
- (9) 『神田明神史考』神田明神史考刊行会、平成四年、三六四〜三七一頁。
- (10) 『神田明神誌』神田明神誌刊行会、昭和六年、七三〜七四頁。
- (11) 『奉祝天皇陛下御在位六十年 神幸祭写真真集 神田明神』神田神社社務所、昭和六〇年。
- (12) 『神田明神史考』神田明神史考刊行会、平成四年、三七二〜三七六頁。
- (13) 『神田神社 平成の御造替事業竣成報告書』神田神社平成の御造替事業奉賛会、平成一一年、七六頁。
- (14) 『平成二七年神田祭』神田神社、平成二七年、七五〜七七頁。
- (15) 前掲秋野「都市祭りの経年的変化―戦後の地域社会の変容と神田祭五〇年の盛衰―」。
- (16) 平成二八年五月に実施した筆者による調査データに基づく。
- (17) 平成二五年に実施した筆者による参与観察の調査データに基づく。
- (18) 前掲秋野「都市祭りの経年的変化―戦後の地域社会の変容と神田祭五〇年の盛衰―」の巻末に調査データの一覧を掲載。
- (19) 『週刊千代田』昭和五二年三月八日付。
- (20) 『週刊千代田』昭和五五年五月一五日付。

- (21) 『週刊千代田』昭和五五年五月二二日付。
- (22) 『週刊千代田』平成二年五月一五日付。
- (23) 『週刊千代田』平成四年四月二二日付。
- (24) 『週刊千代田』平成四年五月一〇日付。
- (25) 『週刊千代田』平成六年四月一五日付。
- (26) 『週刊千代田』平成六年五月一五日付。
- (27) 清水祥彦「現代の神田祭について」都市と祭礼研究会編『神田明神選書1 天下祭読本』雄山閣、平成一九年、一九四頁。
- (28) 『週刊千代田』平成七年三月二二日付、同年七月一五日付。
- (29) 『週刊千代田』平成八年三月一五日付。
- (30) 『週刊千代田』平成八年一月一五日付。
- (31) 『週刊千代田』平成八年四月八日付。
- (32) 『週刊千代田』平成九年二月一五日付。
- (33) 『週刊千代田』平成九年一月二九日付。
- (34) 『朝日新聞』朝刊、東京版、平成九年二月三日付。
- (35) 『週刊千代田』平成一〇年四月二九日付、同五月一五日付。
- (36) 『週刊千代田』平成一一年一月二九日付。
- (37) 『週刊千代田』平成一一年四月二九日付。
- (38) 『週刊千代田』平成一一年五月一五日付。
- (39) 『週刊千代田』平成一一年一〇月一〇日付。
- (40) 『週刊千代田』平成一二年一月一五日付。
- (41) 前掲清水「現代の神田祭について」一九四頁。
- (42) 『朝日新聞』朝刊、東京版、平成一四年五月一二日付。
- (43) 前掲清水「現代の神田祭について」一九五頁。

- (44) 前掲清水「現代の神田祭について」一九五頁。
 (45) 前掲清水「現代の神田祭について」一九五頁。
 (46) 秋野淳一「観客のみえない都市の祭り―神田祭・蔭祭、将門塚保存会大神輿の巡幸―」『都市民俗研究』第一九号、都市民俗学研究会、平成二六年。
 (47) 前掲清水「現代の神田祭について」一九五頁。
 (48) 『朝日新聞』朝刊、平成一八年八月三日付。
 (49) 前掲清水「現代の神田祭について」一九四〜一九五頁。
 (50) 大鳥居信史「特別インタビュー 企業が求める神社の役割とは？」『別冊宝島2082号 日本の神様のすべて』宝島社、平成二五年、八二〜八三頁。
 (51) 『週刊ダイヤモンド』二〇一六年四月一六日号 神社の迷宮』ダイヤモンド社、平成二八年、四四頁。
 (52) 前掲『週刊ダイヤモンド』二〇一六年四月一六日号 神社の迷宮』五八頁。
 (53) 大鳥居吾朗氏は、神田神社宮司に昭和二二年六月に就任し、昭和五七年二月に退任している（『神田明神史考』神田明神史考刊行会、平成四年、三一〇頁）。

追記

本稿は、平成二七年一二月六日（日）に開催された神道宗教学会・第六九回学術大会（於國學院大學）で行った研究発表「神田神社の神職と現代の神田祭」を基に、大幅に加筆・修正したものである。また、平成二四〜二六年度・國學院大學大学院特定課題研究「地域社会の変容と都市祭り―神田祭を事例として」（研究代表・石井研士教授）の研究成果の一部であるとともに、國學院大學二一世紀研究教育計画委員会研究事業「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」（研究代表・阪本是丸教授）の研究成果の一部である。

謝辞

実地調査にあたっては、神田神社の神職の皆様、並びに神田神社の氏子町会の皆様にお世話になりました。文末ながら感謝申し上げます。